



Data

監督：ルイ・レテリエ
 脚本：エド・ソロモン、ボアズ・イーキン、エドワード・リコート
 出演：ジェシー・アイゼンバーグ／マーク・ラファロ／ウディ・ハレルソン／メラニー・ローン／アイラ・フィッシャー／デイヴ・フランコ／コモコ／マイケル・ケイン／モーガン・フリーマン

👁️👁️ みどころ

マジックをテーマにした映画は『幻影師 アイゼンハイム』（06年）が面白かった。しかし、それは所詮19世紀のイリュージョンだから、本作で“フォー・ホースメン”が魅せる最新・最高のイリュージョンとはケタ違い！

ラスベガスの会場に320万ユーロの札束の吹雪を降らせたり、大富豪の口座から1億4000万ドルの預金を移し替えたりするイリュージョンの仕掛けは？またその可否は？それって、犯罪では？

グランド・イリュージョンでは、金庫に眠る5億ドルの札束がニューヨークの会場に舞い散るからお楽しみに。しかして、彼らは一体何のためにこんなイリュージョンを？ド派手な外面とは裏腹のその点を、じっくりと考えてみたいものだ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■イリュージョン映画は面白い！■□■

マジック、奇術、手品には必ずタネや仕掛けがある。それは誰でもわかっているが、カード（トランプ）を使った初歩的なマジックから、引田天功が得意とする大規模で大仕掛けの「脱出マジック」まで、マジックの世界は夢があって面白い。ところが、意外にマジックをテーマにした映画は少なく、日本では『トリック 劇場版2』くらい（『シネマルーム11』321頁参照）？ところが、洋画では何と言っても、19世紀末のウィーンを舞台に展開される、「幻影の中に事実がある」をテーマにしたイリュージョン映画、『幻影師 アイゼンハイム』（06年）が面白かった。

日本を代表するマジシャンMr. マリックはその天才的なマジックを見せてくれるとともに、時々その種明かしをしてくれるところが面白いが、それを見れば見るほどテクニッ

クの巧妙さに圧倒される。本作冒頭、ラスベガスにおいて“フォー・ホースメン”と名乗る4人組のスーパーイリュージョニストチームが巨大ホールを埋め尽くした大観衆の前で挑むのは、何と銀行強盗マジック！「今夜銀行を襲います！」と宣言した“フォー・ホースメン”は、一体どんな銀行強盗マジックを・・・。

■□■銀行の金庫から、320万ユーロが「札束の吹雪」に！■□■

私は本作を予告編で見て「これは必見！」と思った。その理由は、本作冒頭に見るパリの銀行の金庫から320万ユーロの札束を吸い上げ、それをラスベガスの巨大ホールの中に「札束の吹雪」として舞い散らせるマジックを見せられたためだ。その仕掛けの一つは、ステージに置かれた1台の瞬間移動装置。会場から選ばれた1人のフランス人男性は、この瞬間移動装置によってパリ9区にあるクレディ・リパブリカン銀行に瞬間移動させられたが、その様子は彼のヘッドギアに装着されたカメラを通して会場のモニターにリアルタイムで実況中継されていた。

そもそも、ラスベガスからパリまで、どうやって1人の人間を瞬間移動させるの？そのマジックは引田天功の「脱出マジック」でも見ることができるが、ラスベガスとパリは一体何万キロ離れているの？しかも、その金庫に眠っている320万ユーロもの紙幣を強烈な掃除機のようなもので吸い上げるのは一応理解できるが、それをどうやってパリからラスベガスまで運ぶの？

■□■4人の面々の得意技は？彼らはなぜ・・・？■□■

「今夜銀行を襲います！」と宣言し、それを見事に成功させた“フォー・ホースメン”の面々は、①トランプやコインを使い、至近距離にいる少人数の観客に見せるクロスアップ・マジックの達人、J. ダニエル・アトラス（ジェシー・アイゼンバーグ）、②エスケープ・マジックのスペシャリストの女性、ヘンリー・リーブス（アイラ・フィッシャー）、③催眠術の達人で、かつ他人の深層心理を読み取り、錯覚などを利用して意識を操るメンタリズムの達人、メリット・マッキニー（ウディ・ハレルソン）、そして④相手の持ち物を素早く盗むピックポケットと呼ばれる技術の達人、ジャック・ワイルダー（デイヴ・フランコ）の4人組。

この4人組がいかなる「赤い糸」で結ばれたのかは本作冒頭で紹介されるので、それを確認してもらいたいが、そもそもこれはマジック？いやいや、これはれっきとした犯罪では・・・。アメリカのFBIがそう考えたのは当然。しかし、FBI当局はホテルに滞在中のホースメン4人の身柄を拘束し、特別捜査官ディラン（マーク・ラファロ）に捜査の指揮を命じたが、さて“フォー・ホースメン”はなぜこんなマジックを？

■□■興味深い2人のキャラに注目！■□■

あなたは、インターポールという組織があることを知ってる？ネット資料によると、それは犯罪捜査や犯人逮捕に携わる各国の警察の連携を図り、各国間の情報の伝達ルートの

役割を果たす機関で、リヨンに事務総局が置かれている。その主な活動は、国外逃亡被疑者や行方不明者、盗難美術品などの発見、身元不明死体の身元確認などに努める「国際手配制度」や、国際犯罪および国際犯罪者に関する情報のデータベース化とフィードバックなどだ。年に1000件を超える捜査依頼があり、2008年現在6000人の手配者を追跡しているらしい。そのインターポールの女性捜査官アルマ役として登場するのが『イングリシアス・バスターズ』（09年）で、私が注目したフランスの美人女優メラニー・ロランだ（『シネマルーム23』17頁参照）。アルマはかなりスマートな頭脳を持ってそうだから、そのキャラと活躍に注目！

他方、FBIから捜査の責任者を任命されたディランは、相棒としてインターポールのアルマがあてがわれたことに強い不満を示したのは当然。したがって“フォー・ホースメン”の犯罪性を暴くべき、この2人の捜査責任者のチームワークは最初から陰悪だ。もっとも、泥臭い原則型の捜査のくり返して失敗ばかりしているディランは、“フォー・ホースメン”やアルマの引き立て役に過ぎないのかと思っていると、意外にそうでもない。本作後半では、互いに心を開き合っていくディランとアルマの人間関係、男女関係にも注意しつつ、ディランのキャラとその能力にも注目したい。

ややもすれば、本作では“フォー・ホースメン”の華々しいマジック、イリュージョンの展開を応援したくなるが、それだけでは片手落ちなので、ディランとアルマの捜査にも応援を・・・。

■□■マジシャンは大富豪の支援あつてのもの？それとも？■□■

本作で“フォー・ホースメン”の若きリーダー、アトラスを演ずるジェシー・アイゼンバーグは、『ソーシャルネットワーク』（10年）で機関銃のような早口で喋る大学生として登場し、後にフェイスブックの創始者として億万長者になった男マークを演じていた若手俳優だ（『シネマルーム26』18頁参照）。そのジェシーが本作で演ずるアトラスは、ラスベガスでのファースト・イリュージョンでは、自分たちのスポンサーである大富豪アーサー・トレスラー（マイケル・ケイン）をうまく引き立てて観客にアピールしていたが、セカンド・イリュージョンとして設定されたニューオーリンズの会場では・・・？

この会場では、またドでかい「犯罪」をやっつてのけようとする4人のホースメンたちを逮捕するべく、ディランたちFBIの面々が待機していたが、“フォー・ホースメン”のスポンサーたる大富豪トレスラーは悠然と特等席で見物していた。しかし、トレスラーがステージに招かれ、今日はどんなマジックに参加できるのかと楽しみにしていると、何と本人の目の前でトレスラーの口座から1億4000万ドルという巨額の預金が次々と引き出され、観客たちの口座に移し替えられていったからビックリ。なぜ、俺の口座の番号やパスワードをこいつらが知ってるの？

ここでアトラスたち4人のホースメンが行ったマジックは、トレスラーの口座にある大金をニューオーリンズを襲った巨大ハリケーンの被災者たちに少しずつ分け与えるというマジックだが、それは社会的弱者である彼らに対して災害の保険金を支払わなかったトレスラーに対する制裁だったらしい。しかし、なぜアトラスたちは自分たちのスポンサーで

あるトレスラーに対して、こんな手ひどい仕打ち（マジック）を・・・？また、これはいわば「義賊」としての行動だが、これだって立派な犯罪になることは明らかだから、その意味でもなぜこんなマジックを・・・？それをじっくり考えることが、本作で見せるマジックに酔いしれるよりも大切なことだと、私は思うのだが・・・。

■□■興味深いこの男のキャラにも注目！■□■

本作にはさらに注目すべきキャラとして、モーガン・フリーマン演ずるサディアス・ブラッドリーが登場する。サディアスは、マジックの種明かしを生業としているちょっと嫌味ながら自信たっぷりの男だ。したがって、ディランもあまり気に入っていないが、捜査を進めるためにはこの男の力を頼りにせざるをえないらしい。ラスベガスの会場でのマジックの一部始終を録画していたサディアスは、自信たっぷりにディランに対してその種明かしを・・・。なるほど、そういうことだったのか！ここまで明確にあの銀行強盗マジックの種明かしをされると、「ミスディレクション。

それがマジックの基本だ！」と言うサディアスの言葉にも絶対的な説得力があることになる。マジックで金を稼ぐ奴がいれば、マジックの種明かしをして金を稼ぐ奴もいるわけだ。なるほど、世の中うまく回っているものだと感心させられたが、サディアスはなぜ今マジックをする側ではなく、種明かしをする側に立っているの？

前述のように、本作ではややもすればマジックの面白さと、その種明かしに興味が集がちだが、こんな興味深い男のキャラにも注目！支援してやっていたはずの“フォー・ホースメン”からニューオーリンズの会場で煮え湯を飲まれた大富豪トレスラーは激怒し、“フォー・ホースメン”への復讐をそれまで犬猿の仲であったサディアスに依頼したから、話はさらに複雑になっていく。年をとったとはいえ、サディアスの頭のキレは今なお



『グランド・イリュージョン スタンダード・エディション』

価格 ¥3,200+税 発売元・販売元 株式会社KADOKAWA 角川書店

健在。FBIへの協力においてもサディアスは重要な役割を果たしていたが、トレスラーの個人的な恨みをはらすための協力も大金さえ払ってくれればOK。そこで、トレスラーと手を組んだサディアスが“フォー・ホースメン”を追い詰めるために立てた策略は？

■□■ニューヨークでのグランド・イリュージョンは？■□■

日本でもアメリカでも、マスコミは“フォー・ホースメン”のようなド派手なパフォーマンスで、大勢の観客を熱狂させるニュースが大好きだから、そのラストショーとされたニューヨークでのグランド・イリュージョンに対しては期待が高まるばかり。そこで何を披露するのかは、“フォー・ホースメン”の側からは何も示されなかったが、ディランとアルマは彼らがニューヨークの金庫に眠る5億ドルの隠し金に目をつけていることを示す有力な情報を入手したため、そこでの（現行犯）逮捕を目指して万全の体制をとっていた。マジックは基本的に人と人の騙し合いだし、相手の考えることの3歩も5歩も先を考えてタネや仕掛けを作らなければ成功はありえない。したがって、それを考え、練り上げるホースメンたちの知恵の絞り方が大変なら、そのトリックをあらかじめ見破り、4人のホースメンの逮捕を狙う、サディアスやディラン、そしてアルマたちの知恵の絞り方も大変だ。さあ、4人のホースメンたちはどうやって金庫の中に眠る5億ドルの札束を奪い取り、それをニューヨークのラストショーで空からまき散らすのだろうか？

本作は知恵と知恵との衝突がテーマで、決してアクション映画ではないが、まんまと5億ドルの強奪（？）に成功した後は、車で逃走をはかるジャックとこれを追い詰めようとする捜査陣との間でものすごいカーレースが展開されるから、それに注目！そして、横転し、爆発・炎上してしまった車の中に閉じ込められたジャックはこれによって重要な書類と共に死んでしまった（？）からディランたちは大いに残念だったが、さて、その真相は・・・？

■□■5人目のホースメンは誰だ！■□■

本作はマジック映画だから、至る所にタネが仕掛けられているのは当然。したがって、それをいかに見抜くかということに、知的好奇心を持って精神を集中する必要がある。FBIのディランとインターポールのアルマとの共同捜査は当初こそ混乱していたものの、中盤からは呼吸はピッタリ！そんな中、アルマは“フォー・ホースメン”の犯行動機に関心を寄せたが、ディランは5人目のホースメンが存在するのではないかと睨んでいた。そうでなければ、あんな鮮やかなマジックを次々と成功させるのは不可能というわけだ。しかし、そんなディランの主張も明確な根拠を持ったものではなく、あくまで推測の範囲内。

しかして、本作のホントのラストにはこの5人目のホースメンは誰だ！というテーマをめぐる、あっと驚く展開が待っているのにそれに注目！！本作の途中でそのタネに気づいた人は、さてどれくらいいるだろうか・・・？

2013（平成25）年11月7日記